



1758  
へ呂5  
特



手紙

手紙

手紙

手紙

手紙

手紙のついで

手紙









尸符かき一巻のそのの梅もあぬこ  
体もくるといふから仏の濁世を空に  
示現してうら業門のを食喰れ  
くまきの人とまきすけのやうやと  
けしーのまきまきよまきまき  
みまき唯母智すまきまきしては  
出偏固の者也剛毅木訥の仁し  
とまきをらむまき菓の法賢を

まきまき

卯月朔日御ふし清めすは昔  
此はふをまきまきまきまき  
大師開基の時あんとあまふし  
歳末まきまきまきまきまき  
清くえ一たきまきまき恩沢荒  
まきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまき

何んぞかきしつゝも  
まぢらふに  
まぢらふに  
まぢらふに  
まぢらふに

白

料拾てまぢらふに  
まぢらふに

雲ら良ハ何んぞかきしつゝも

芭蕉の下やあしをうらむ

薪氷家さうとまぢらふに

ねよまぢらふの眺共くまぢらふ

及ひ思ハ羈旅の難をりつゝ

旅之曉ゆふと判りてまぢらふに

まぢらふにまぢらふにまぢらふに

仍てまぢらふにまぢらふに

まぢらふにまぢらふに

まぢらふにまぢらふに

まぢらふにまぢらふに

まぢらふにまぢらふに



ひらり入て滝の裏よりわたり  
らみの麓とすけしけり也

暫時の遊く遊るや夏の物  
那頃のころれとらふも知人あれ  
そよありあそびくしあしきんを  
ゆくとすうきく一村をんしり  
りよ雨降り日そられ農家の家  
よよあそびりてゆれに又路

きりうこし野田のうわら  
まがまのこよふりたれ、路は  
とこしきしきしきしきしきし  
いしすくわされもは路の横  
よすれしうかくあは人のん  
ふとまきしあやしりははる  
のこまの所しきしきしきし  
しきりらこまきあはるの

位とさししてしるすは、小堀と  
くさくさなれども、すうれぬふの  
やうしうりたれえ

うほれとハハきねふのみんをくこま

おて人里よむれハあまじと  
つりよぬかしてさそとみり

黒羽の館代侍坊ち伊一のまよ  
まふはふさむもあまの心

日新後つきて共才挑あふと  
まう朝夕の節くさくさい自のま  
とけいして親属のまよしおね  
うりこいそあうりくさくさい那  
よ遠送して大進おの位を一足し  
那後の隠守をあらうてみ深のまの  
古蹟をさふられよの八幡宮よ信  
上市廟の的を射しあふりして

ふぶ氏神正八十八とららるる  
七神社くくねとてうへに  
とつりうきくくねらるる  
宅くくゆん

神驗光明寺とて有る  
としり者堂とてあり

ふぶ氏神正八十八とららるる  
高ふ雲とて有るの  
とみはわり

坂立横の五人とて有る  
むすもくやとて有る

くねのふたつとて有る  
いつつやとて有る  
ふぶ氏神正八十八とららるる  
ふぶ氏神正八十八とららるる  
ふぶ氏神正八十八とららるる

とくあぐあらり〜して谷に  
あ〜ね板を〜苔を〜して外  
月のも今ね〜十景あるよ  
橋を〜りして山門へ入  
よ〜の庭〜いつの〜やとぼの  
ふ〜うらのちねハ石上の小菴 岩  
窟よ〜いけり妙禪師の石洞  
けまは山の名をよとみ〜

木啄もな〜やう〜なまま  
とちあ〜るを〜お行  
そ〜教せるより 結体〜  
ふ〜送ら〜はけのみの〜  
ね〜とを〜  
〜の〜

跡を横〜  
教せんハ温泉水の〜

石の毒まよきしこころはくらくらする  
 喋のうらみはさかぬのうらみはさかぬ  
 うらみはさかぬのうらみはさかぬ  
 柳ハサカサの里とありて田の畔  
 とあそびは石の那字戸部某の  
 け柳みまをうらみとあそぶのうらみ  
 け柳みまをうらみとあそぶのうらみ  
 しるるは柳のうらみとあそぶのうらみ  
 け柳みまをうらみとあそぶのうらみ

まよりぢりれ

田一抔掘りて去る柳の  
 け柳みまをうらみとあそぶのうらみ  
 のうらみはさかぬのうらみはさかぬ  
 都一と伝ふしとあそぶのうらみ  
 け柳みまをうらみとあそぶのうらみ  
 け柳みまをうらみとあそぶのうらみ  
 け柳みまをうらみとあそぶのうらみ  
 け柳みまをうらみとあそぶのうらみ

だくね也卯の糸のほがしき  
糸のほがしきし言ふとみるん  
はうすち古人の冠をふし  
改しすちとほの筆のし  
あわしき

卯の糸をかたし開のほがしき

とくしきしきしきしきしき

川を海へたしきしきしき

子石城相馬三春の庄常陸下

の地をさしきしきしきしき

まをりしきしきしきしき

新しきしきしきしきしき

とくしきしきしきしきしき

先ちけの園いしきしきしき

同も途のくしきしきしき

風系しきしきしきしきしき

新くうくうくうくうくうくうくう

凡後の物ややくの田植う

きつうくうくうくうくうくうくう

根きりことしてくうくうくうくう

此右の傳よ大さくうくうくうくう

ときめくうくうくうくうくうくう

うふくうくうくうくうくうくう

あうくうくうくうくうくう

粟といふ文字ハ西の木とがて

西方降きよはかりといひ基を落

のこを根くうくうくうくうくう

のうくうくう

世の人乃んけぬふや軒の粟

等窟ろく室とをて五里年柱皮

の宿を維としてあうくうくうくう

色くうくうくうくうくうくう

とやうくうくうくうくうくう

ふうくまはまうと人くまらる水  
くしま知人うーはをる人  
まいくまくくまあうまて目ん  
くのくまうりぬこおねりたる  
ままて黒海のまをーとー  
福崎よまあうあくれハまうりら  
のるまうらてまうのりくま  
くまら後の小里よ石ままよたて  
けりまのまうのまうてまあう  
昔ハそのとよけーをはまの人の  
ままをあーてけんを識けを  
まみてけ谷よつきま海せハ石の  
面トままうーまうてままて  
くまらま

早苗くまうまおあまのつ標  
月の標のわーをまて標のま



と右に如所 佐藤左司の日記に  
たのころは一とすなりなる 飯塚の軍  
強弱と云ふことありしに  
しるあつたりもた目、旧館也棟  
と大木のたると人のたぬゆらよす  
て洞をさるしみるのたると  
ア家の石碑をたがす中し二人の  
塚ふさるし先んた也たるとも  
ういししき人の世もや入つらむ  
うらとたをわしる 湊川の石碑  
をさるしあつたりと入し大木  
をんハウまよ義経の太刀をさ  
らひたるとしりし 什おとす

及も太刀も五月より  
兵城

五月朔日のこと也と飯塚  
る温泉のれん湯に入して宿をら



是迄の郡に入まはる中お冥月  
の塚といつこのまゝと人々  
とそちのまゝととゆらば  
の里をのまゝととゆらば  
の社とととのまゝととゆらば  
ははの五月まゝととゆらば  
まゝととゆらばととゆらば  
まゝととゆらばととゆらば  
のまゝととゆらばととゆらば

是迄の郡に入まはる中お冥月  
の塚といつこのまゝと人々  
とそちのまゝととゆらば  
の里をのまゝととゆらば  
の社とととのまゝととゆらば  
ははの五月まゝととゆらば  
まゝととゆらばととゆらば  
まゝととゆらばととゆらば  
のまゝととゆらばととゆらば

是迄の郡に入まはる中お冥月  
の塚といつこのまゝと人々  
とそちのまゝととゆらば  
の里をのまゝととゆらば  
の社とととのまゝととゆらば  
ははの五月まゝととゆらば  
まゝととゆらばととゆらば  
まゝととゆらばととゆらば  
のまゝととゆらばととゆらば

の橋杭よりきりぬきをりしと  
きはよやねはけしむ位と  
海かたにあらはれありし  
継ぎとせしむし今將子  
のしとせしむしと  
ねのしとせしむし

武深のねむしとせしむ  
しとせしむしとせしむ  
しとせしむしとせしむ

梅よりねはとれと之月  
えん川を流しては  
ゆくりと流るる  
てらるる  
けり  
らるる  
を考ふ

一日案内す

あつて秋のききごころや  
玉田よと仰つて一國ハらうと  
いふも也日暮しりぬねの暮  
入て空をよめ下ととごころ  
うくかゆけきハふとごころ  
とごころハふみこれ業師を天神  
のいはるとおきてもらハくれぬ  
に清浄なるものあり畫うかて  
思得のほろつけと草鞋  
あつてふハふ風流のしき  
うましくむりて其美をみか

あつて秋のききごころや  
玉田よと仰つて一國ハらうと  
いふも也日暮しりぬねの暮  
入て空をよめ下ととごころ  
うくかゆけきハふとごころ  
とごころハふみこれ業師を天神  
のいはるとおきてもらハくれぬ  
に清浄なるものあり畫うかて  
思得のほろつけと草鞋  
あつてふハふ風流のしき  
うましくむりて其美をみか

を細く國をさし献すところあり

臺碑

市川村多賀城に有

つゝの石ありハ高サ六尺餘横ニ三人計  
此六口と云テ又字悉也四維國  
界之教里と云テ此城神是元  
年按察使鎮守府將軍大野朝臣  
東人之所里也天平宝字六年參  
議東海東山節度使同將軍  
憲養朝臣猶泔造而十二月朔日

と有聖武皇帝の時と云あり  
むうしりのみむらゝの枕をけく  
浪傳ふといししん山崩川落てに  
けしんたふし石ハ切てさよこん  
本ハ古てさよふくうりしはし  
代さあしししん法ししん  
のこをさあししんてさよさし  
い歳の記念今眼おし古人の心

を園すり紙の一紙ある命の  
吸し薪旅の芳をちりれこ  
間し落るるもあ也

うれり野田の玉川伴のふをらぬ  
末乃松ふはらと道て末松らと  
松のあらく皆葉はらとてをねを  
うりて松とつてあらぬ松の末に松  
はらくのここととちりてはら

はらすの海へ入おのしねをば育  
ぬのらも神くわして夕月を遊  
はらつ松もらとちりて松の末に  
まいつてみかたのちりてはら  
てらるるもはらとちりてはら  
いとちも也其は目目にははら  
寝るもはらとちりてはらとちり  
のらとちりてはらとちりてはら

まもあしひまいさくら 洞子くら  
 よて 枕らうらうら ちりきり  
 くらふささの 遺風とれくら  
 しみねしきくくら 知語くら  
 のし神し 借國守 五真くら  
 て宮柱やうら 杉椽くら  
 うら石の階くら 奴くら 朔日あ  
 ちの玉くら ちりきりくら ちりきりくら

栗菴土の境くら 神靈あくら  
 くらくらくらくら くらくらくらくら  
 いと 貴くら 神くら くらくら くらくら  
 くらくらくら くらくらくら くらくらくら  
 くらくら 奇進くら くらくら くらくら  
 今月のくら くらくらくら くらくらくら  
 くらくら 渠ハ 勇義忠孝の士也 佳命  
 今よくらくらくら くらくらくら くらくらくら



城人の道と物言をさすく  
ふくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
午よらららららららららららららららららら  
其回二里除確修の如く  
竹さあゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら  
一のぬ風うくくくくくくくくくくくくくくくく  
東南より海をへて江の中一里  
浙江の湖をききふゆくのぬを

あつて歌りの天を指さすの  
まはらふふふふふふふふふふふふふふふふ  
こ重よきくくくくくくくくくくくくくくくく  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
ゆ風よ吹くくくくくくくくくくくくくくくく  
まめくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

神のむしー大とすまのるるらわと  
うや造化の天といつまの人々筆  
そふらひし詞とアヒヤサ

雄流の破れ地つていそ海をむら  
流也すまぬ禪師のふ堂の流  
唯経石るるる將ねのふ流り  
世といふ人し係くくはるる  
流流れくくくくくくくくくく

卷四の終り

それすまうくえふらくくくく  
ふくく月海くくくくくくく  
又あききい江くくくくくく  
ゆれハ窓をらくくく二階を伝て  
風雲の中へ流るるくくくく  
あやーまはまてあまらつたに

松崎や流るるをれ  
ふくくく

予ハワレトシテ一  
らとて四座をわたりし時  
松崎の侍ありるふお通  
とての心平を矯る心  
こころのなごり思  
あらりあり

十一日瑞雲ちよ指  
世の昔たる世の年  
へ

へ月切羽の厚同  
雲み禪師の法化  
夢はりて金壁  
仏土成就の大伽  
徳見仏聖のち  
ナニハ平和泉  
新しきの徳  
一雉志葛菫の

とちわうす路し路しききして  
石の巻といし漆し木ころねあ  
とよみてまじし金花と海と  
見やうし數百の廻入にうつと  
ひ人及地をいしうひして電の  
煙をうしききりこいしうやうぢ  
下よしもまじし木と木ととま  
ころよちうす人しし海と  
小室ししおをいししつ水  
みそめらたまじし神のち  
尾ゆらの牧よのききりし  
めしきりしききりし  
ましきよししし戸伊しし  
一室しして平泉しきりし  
余里しししし

三代の業耀一膳のちしし



す 經堂ハ三將の像とのく  
光堂ハと代カ権を 祀りところの  
佛と安置す 七宝をうとく  
殊の扉風もやまき金の櫃、ま  
雪よ移して既頽廢に座の最  
と成くさをと四面新し固て蕨  
を露後て現るを 後物付手成  
の行合とハまはり

五月旬の時のくくや光堂  
南戸道きくくくやりて光堂の  
里くゆら小くつゆにけのくゆを  
さしてまらこのゆらけ尿前の開  
くくくく出羽のまくくくく  
此路旅人像るるくくくく  
開くくくくくくくくくく  
開くくくくくくくくくく

日就苦多れん封人のみかへん  
うけし念をいぢむに風ぬり  
てくまのこの中へ

登壇ちみ尿すか 杖をと

何うのこもより出相のこ  
火らとほしてぬこころ  
れはるまの人のみかへん  
こころしむるこころし人

おのれは宛喜鬼のる者及根  
をよこし 櫻の杖と携りて  
えよまきり くらふあや  
うまのこもあはさひり  
事きいづいをまてはよつ  
り 何れかのこしき  
森とこし 一鳥まき  
下園まきりあひて

雪の初踏ふく 氷をわたり  
よ 踏し 靴よ つまみ 汗を流  
しと 衣の上の 汗よ お川の  
葉のよ 水のよ のよ せよ せよ  
か 不用の せよ せよ せよ  
せよ せよ せよ せよ せよ  
せよ せよ せよ せよ せよ

んせ

尾不澤しと 清風とと 者をと  
れ せよ せよ せよ せよ せよ  
せよ 都 せよ せよ せよ せよ  
せよ せよ せよ せよ せよ せよ  
せよ せよ せよ せよ せよ せよ  
せよ せよ せよ せよ せよ せよ

せよ せよ せよ せよ せよ せよ



遠出よふいおつ下のひまのあ

よふを待たしお影のえ

稽芻する人ハ古代のすい<sub>い</sub> <sub>い</sub>

山形頗るくま石とよくらまなり

慈覺大師の同基くして跡

閑の地也一見すくく一人と

のさくちくく依りて見んはく

と何てぬく共同せまくくり也

川いすくくく林の坊く宿

まてく上の堂くのくく石

と殿と重てくくく木橋手回

土石赤て昔備く石上の院

廊を閉ておのくくくく

くくくくくくくくくく

佳景くくくくくくく

閑くくくくくくく入

夏長の寂然集

夏長の寂然集

夏長の寂然集

夏長の寂然集

山の上川のほとと大石田のほとと  
日知を行くまゝとちよと離譜の後  
ふられてふれぬまのむらゝととこ  
しきつ角つあうのつとやりとちや  
はらふらうちあゝと新ちや  
返るゝあみまうらふとととみら  
ちるゝとら人ゝとけれすとや  
ふととまあゝとこのつら風の  
けまゝとちやり

山の上川のほとと大石田のほとと  
日知を行くまゝとちよと離譜の後  
ふられてふれぬまのむらゝととこ  
しきつ角つあうのつとやりとちや  
はらふらうちあゝと新ちや  
返るゝあみまうらふとととみら  
ちるゝとら人ゝとけれすとや  
ふととまあゝとこのつら風の  
けまゝとちやり

仏人等を岸より修てまゝに  
まつてまゝあやう

五月廿五日をいつて早一と云ふ

六月三日羽黒ふらむら圖司た吉

とと者をととて別ち代今んえの

因利と借す南谷のふはる

今一と憐愍の情こゝやう

あう

甲日本坊々をいつて誹諧具り

有難や雪とらうす南谷

五日権現と詣當山同願能除

大師といつての代の人とまを

延喜式と羽列里山の神

社と有書寫黒の字と里と

ふらうや羽列黒とと申

て羽黒とととや出羽といつて

鳥の毛羽と此國の貢と献と  
風土記に依りて月と湯殿  
を合て三とて當寺武江ま  
敵と屬して天台止觀の月明  
らるる因縁融通の法の灯しけ  
るにて僧坊棟とて終験  
行法を勵して天と靈地の縁  
知人貴且らつる繁榮長とて  
つらなれとと備けし

八日月とよめらる本郷をあら  
し引り實家とて此を色強力  
とてのよらひしれて雨と雪と  
氣の中よ氷雪と踏てのりら  
り八里とよ一日月行居の雪と  
よ入とてやられ身終るる  
頂上と踏氷と日没して日影ら

毎と薄い隙を村くして即ち  
つらと多日おしそははるこ  
沼後くく

谷の傍に鋸流の谷とよまよ  
淵は雲水と撰く字より潔く  
しと釵と打鉄月山と銘を切  
て世に貴くする彼龍泉よ  
と緯とわす将莫那のじと

そよ道よ城社の城あきくめ  
中とそれきりやうく積りて  
とりーやうみあふとと尺くり  
橋のつらとまはひくやうか  
族雪のりくけして春をこ  
まよみよのふのりかき  
梅よさうさうりく  
傍のそよのえしとまよよ

れくくしてさくめさくせら中の  
遊ふり者の法式くく他言  
下を極きす仍し善くそくし  
坊くゆれん阿國國の善くし  
とと順礼のふく経母とす

清くやちめさく月のおさく  
まの善くまじりさくし月のみ  
信くしめはゆめくよめくし

羽黒くくして鶴く國のゆとく  
氏重行とく村のゆめくし  
うれし誹言一さくきた吉くし  
さくめ川ゆめくさくし而ゆの漆  
さくく割店名玉とく善所のは  
を右くくす

はゆめくよめくし

暑き日は海よりしづかに上り  
江より陸の風をぬきおろす  
今家ほろし方丁と貴河田の陸  
より北の方よりと砂礫を傳し  
いこころあつて其際十里の  
やがてくはぬ風を吹上  
雨朦朧として海のしづかに  
舟中より莫化して雨にみ奇せと

は雨後の晴色に彩ぬ  
のさばりし膝をいもして  
をたしむる天の霧に  
へうへうと出たり行く  
くまの足跡をたどる  
らさき世の終りと  
岸より海とあはれ  
ゆるり梅のたれ



の行人をよめる江上よ水陸  
 阿り神功后宮の清墓ととも  
 を干満珠とともけふよち  
 ありしやいふことすいふ  
 中よやそよのふよなして  
 名を掲ぐ風来一眠のす  
 おつて南よ海天をほ  
 其陰うつりて江のあり西へやく  
 の開路をさり東に流を築て  
 舟切しつるる海北よ  
 えて流み今よとけり  
 江の縦横一里をり付ノ  
 といて又異なるれ修ハ  
 かく象深ハ  
 りよ小よみよ地勢  
 をふや

象深や雨くみ絶ゆるあふ  
波神や勢はさぬし海原

みふれ

象深や料理はく神象

しんが

象のふや戸板をふかして又  
波 このふのふく世耳

岩上は 唯鳩の言をきく

波はくぬみありさやみさこの象 まじ

海田の余はりくと言して北陸の  
波はくぬみありさやみさこの象  
さしめくし加賀の府をくし西世  
とや嵐の国とくゆきし海原  
の地はまじりて改て改り一の  
か一ゆりの開も到らせ九日  
暑温のさし伸もあわさし  
おみさのしちをさしめくし

子月廿六日 常のちよひ  
荒海や休後よきあふ天の

今ハ親一子もさす大り  
好き一北國一の羅アを  
出つれなれと捲引し  
存しよ一河防て画のさ  
みさ廿のあうこ人斗し  
手たしよみのこのなまし

おぼしとよけんおほの  
ほと下のお女あ一河防か  
つらしよ一河防て画のさ  
つすハ右つ一子もさす大り  
あふらりしよあふらりし  
あふのこのあふらりし  
あふらりしよあふらりし



れ川をわたりて那古とて所  
生擔籠の者はは、春をうけても  
知秋のしをとてくさりのこと  
人よるれとそより五里いろ  
伊ひしむあめら陰よあ  
庭のせはゆらこくすくす水えき  
の一和のるくくりのあささ  
つらきとけれてこの園に入

こでの香や  
入右もをゆゆ  
千のあくらりくく谷をくく  
今頃ハ七月中の五日しうま  
又ほあうよ商人に處とて者  
もくもくゆゆゆとくくく  
一袋とそりのははゆゆとくく  
ふのくくくくせよ商人とゆ  
しきくのかをよゆゆゆく

具見進言を信ず

塚と初げ、家経あるハ時風

あつちのうらみ

お清の母とむじりわん茄子

途中 喰

つくと目ハ難句とわりの風

少ねとてあつち

とちのうらみわん吹

此不太田の神一社一詣たらぬ

甲綿のゆかりは芳は氏一

属と一討義朝とありあつち

とうわつちと平士のあつち

目庇より吹み一すくはる

よよのちりあ金のとらあつち龍

うね形ちりあ蓋討れの及

才学義仲ちりあつち社

よこめしれはびくく一極北の津を  
う供とく一木一花よのあつり  
縁紀くくみるいり

目むんおろ甲の下乃さくくす  
山中の湯り水くくくくくく  
く嶽はくくくみるくくくくくく  
たのらゆく観音堂ありふ  
山のほくくくくくくくくく  
とちりさとかいいてはる大急大進  
の像と安んずくくくくくく  
とくすのくくくくくくくくく  
く字をくくくくくくくくく  
石くくくくく古松極くくくく  
草くくくくの小出まきくくく  
まくくくくくみぬのくくく  
石くくくくくくくくくく

温泉の浴す其功有りて

と

山中やる菊の香をみよぬほの白

つとてとておの久きまを物とし

いよこ水重くしうれは又誹諧を

好そ浴の貞室より寧のむし

空ありこまりこ比風雜くを傳

りてれて浴をゆる貝屋のいん

ごまひりてせよとさる功名

及び一村判付の料を信すと

え今又むし一徳とらうりぬ

曹之良ハ腰を物して伊勢の

国も終るとおのりありあれ

先きてり

いよこまをあれ休とて妙の原

とちりてりありありあり



おりのしんすけ 隻鬼のちし  
雪よすさかあ〜〜〜

今日あやまけりほえん  
大聖おの城お全昌寺とらふ  
ち〜〜とるら 杉加賀の地  
音らふもふの長けるもは  
〜 終宵お風すや〜の心  
とおす一おの島あ〜

若もお風をとけ〜  
お〜鳴りの〜 鐘板〜  
あ〜すむ〜 鐘板〜  
食堂〜 入りよハ〜  
〜心の〜  
下〜を〜 傍〜  
〜の〜  
お〜と〜中の柳〜

上座掃てあつやちこしあ柳  
さりあへぬさちこしあ柳  
さちこしあ柳  
の入しをさちこしあ柳  
のねをさちこしあ柳

此一首さちこしあ柳  
さちこしあ柳  
さちこしあ柳  
さちこしあ柳

一辨をさちこしあ柳  
さちこしあ柳

丸田天龍寺の者たちと  
さちこしあ柳  
さちこしあ柳  
さちこしあ柳  
さちこしあ柳  
さちこしあ柳  
さちこしあ柳  
さちこしあ柳

すゆ今統ふくらしみし

おかきつる引はく余成

五十一アらし入て永平さるれ

す道之修師の聖寺や邦撰

ふ里を遊てくくらし修

記をのくくあも貴さくゆ

あさくも

福井ハニ里けあふく又版

きしめして出さくしきさくゆあ

路ししくしきさくし等執しき

たき隠士をといつきのきさくし

びりしきさくしきさくしきさく

しきさくしきさくしきさくし

てさくしきさくしきさくし

さくしきさくしきさくし

さくしきさくしきさくし



うく水て比那へらるるあしうく  
あまむつの伝説をかきかしてあは  
の蒸ハ物〜〜あ〜〜  
の陣と〜〜〜はなは〜  
あ〜〜〜燧〜〜城〜〜あ  
〜初序と〜〜〜ナ字の〜  
あれ〜〜あは〜〜宿と  
〜〜の夜月ぬ〜〜

あまのあ〜〜〜あ〜〜  
〜〜〜越路のあ〜〜  
の伝説〜〜〜  
〜〜〜あ〜〜〜  
〜〜〜仲哀天皇の御  
廟也社頭神〜〜  
の洞〜月のみりあ入〜  
の〜〜を〜〜



やうくもてりては力借あり  
あしりのそて上風吹ぬ  
そくつらぬはふあひ  
あし海士のわあふては  
さほふさあひりさあふ茶を飲  
ゆとあふてたふれぬ  
ひしとてはあひり  
あしやあふさあひりあひり

はのるわあひりては

其日のらあひり  
等秘

あしとてはあひり

あしとてはあひり

あしとてはあひり

あしとてはあひり

あしとてはあひり

あしとてはあひり

て如行くやあ〜入集らふ不  
川子前々父ふ其おと〜  
き人〜日〜夜〜と〜長〜候  
せのの〜あ〜ふ〜日  
ねひ思ら〜ら〜旅のあ〜と  
と〜い〜さ〜か〜さ〜さ〜さ〜さ〜月  
ちか〜さ〜あ〜く〜伊〜知〜の〜道〜空  
お〜う〜ん〜と〜よ〜み〜あ〜の〜の〜り〜

吟の  
あ〜さ〜み〜

ら〜れ〜り〜此〜

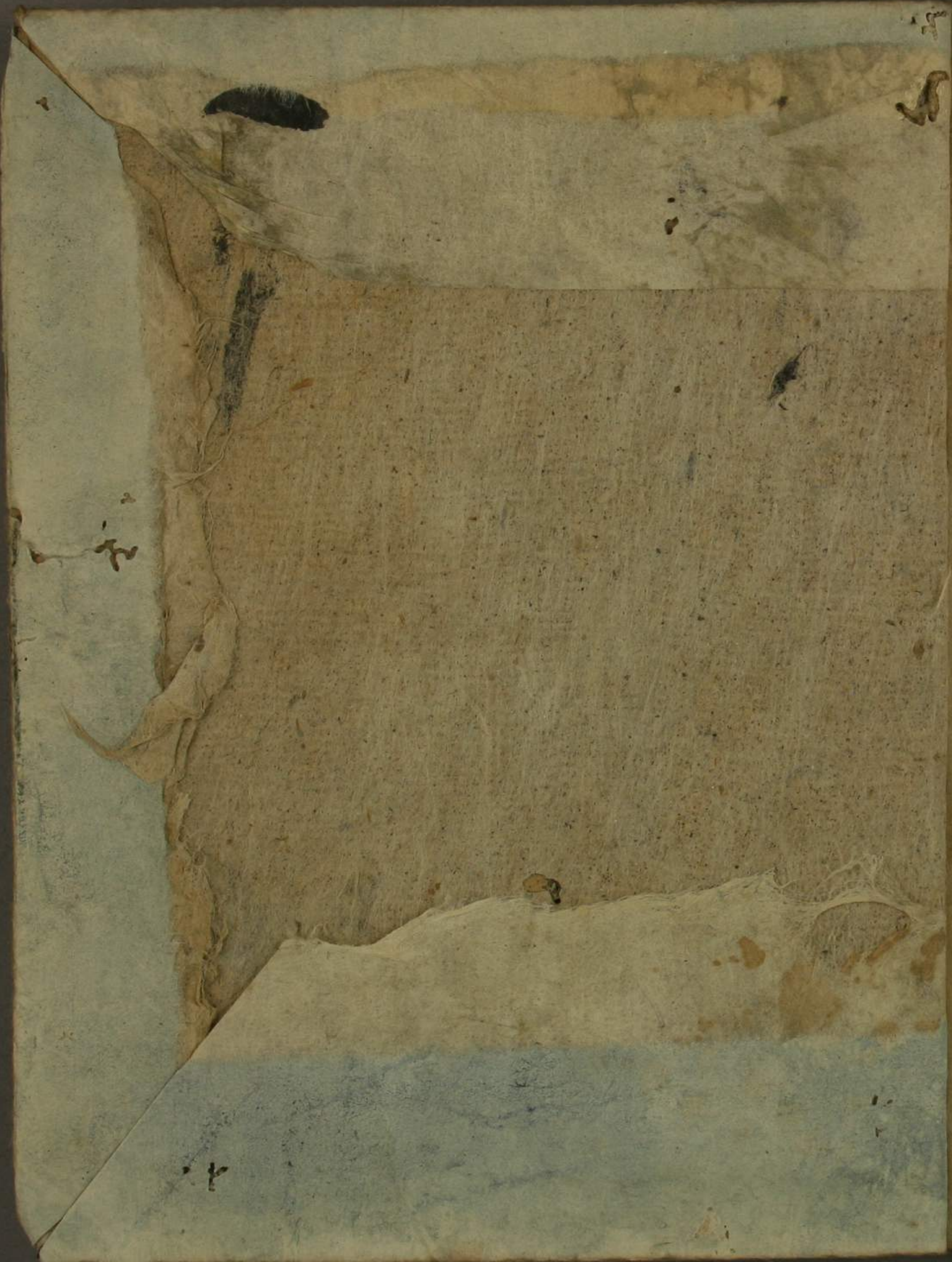


此一書ハ芭蕉翁奥羽ノ紀行ノ目録也  
素庵ノ筆也表ハ縦五寸五歩横四寸  
七歩紙ノ重ハ十二首尾小自紙ニ加小  
外ハ素庵ノ跋ニ珍畧紙成紙ノ表  
紙紫乃糸糸紫ハ金ノ表補らしし及  
る向地ニたぐのやうなりと自筆ノ書  
テ瀧身ノ稿ニ遷化ノ後ハ人志未ク  
行ふこと又其蹟ノ書ハ人智最ク行

今昔集の由成りて撰定す  
今昔集の由成りて撰定す

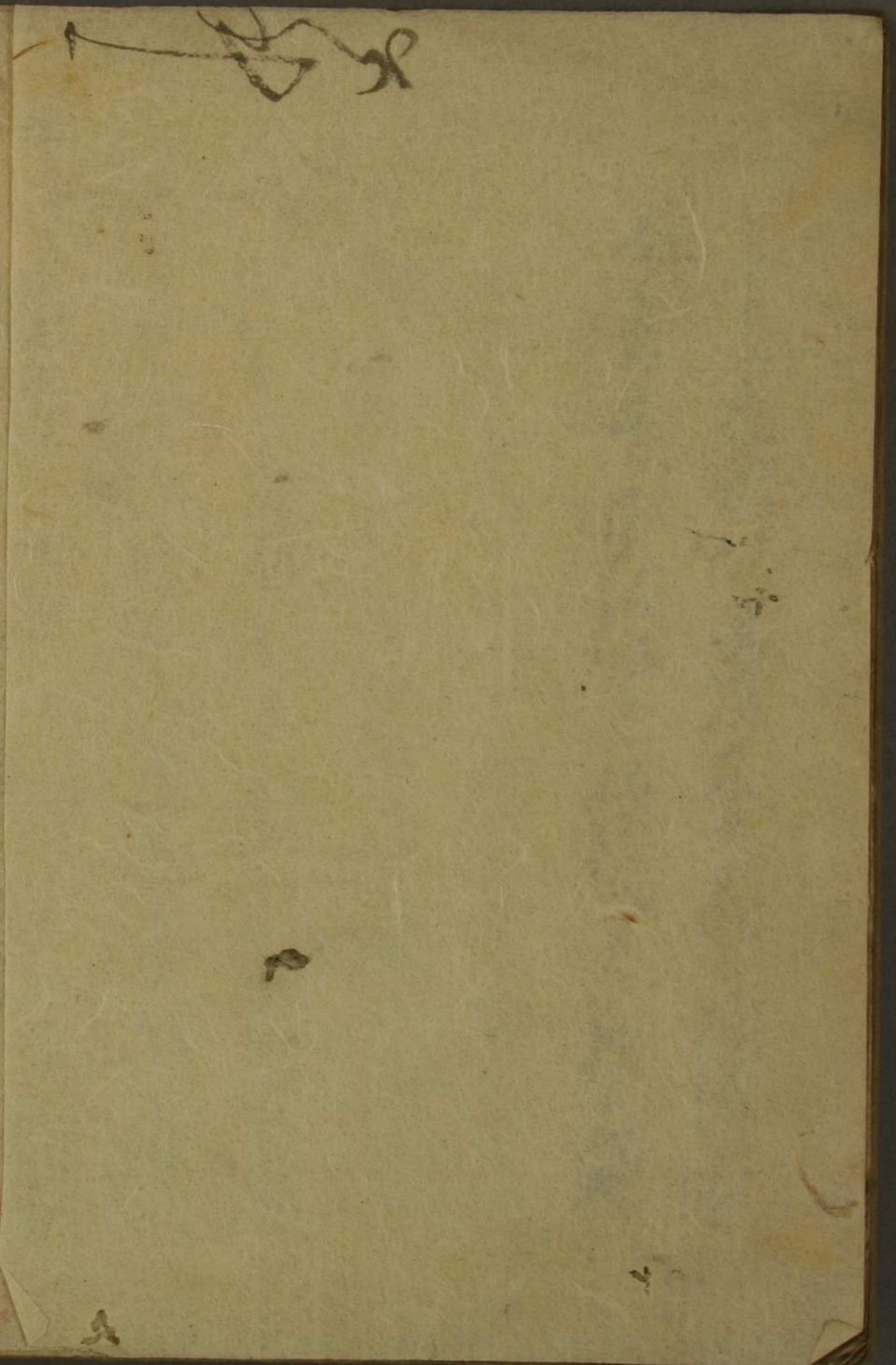
京寺町二条上町  
井筒屋唐之泉板





25

東洋の原上野  
井筒の石巻松屋



Handwritten markings at the top of the back cover, possibly a signature or date.

Small handwritten mark at the bottom center of the back cover.

